2022.12.15
No.232

編集・発行人　樋口みな子
E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間2,000円）

一人ひとりが命を輝かせて夢や希望を歌に託したコンサートに感動！

クッキングハウス３５周年を祝う会に参加して

11.17 調布市グリーンホールで　写真「クッキングハウス」提供

北海道は雪景色に一変しました。諸物価が値上げしていますが、灯油代の高騰が痛いです。みなさまはお元気ですか？

私は11月に調布市で活動を続けている「クッキングハウス」35周年を祝う会に参加しました。

「クッキングハウス」って何？と北海道ではあまり知られていませんので少し説明します。会は1987年に心の病を抱えた人たちの居場所として、調布市内のマンションの一室から精神保健福祉士の松浦幸子さんが開設。92年にレストラン「クッキングハウス」で家庭料理を、心の病気を抱える人たちがスタッフやボランティアと共に働き、「おいしいね」と語り合う場になりました。地域に開かれているのがとても素晴らしい。

クッキングハウスは「心病む人とともに、この街で豊かに暮らす」「安心して、自分らしさを取り戻せる居場所」など5つの理念があります。

私は松浦さんの著書「不思議なレストラン」を読み、活動のユニークさに感動し「クッキングハウス会」に入会しました。私は臨床検査技師でしたが、旭川の大学病院で多くの精神科の患者さんと接する機会がありましたし、妹の夫は東京都内で臨床心理士として患者さんの支援をしていました。会員になってもう20年近くになると思います。会う機会もないと賛助会員でしたが、松浦さんが「銀河通信」200号を祝う会に思いがけなく参加してくださり、もっと会の活動を応援したいと正会員になりました。35年間もたゆまぬ歩みはどれほど、心の病を抱えた人たちを勇気づけたことでしょう。全国紙で報道して頂き、多くの人に知ってもらいたいです。持続的な活動は北海道では少ないです。

5年前の30周年を祝う会にも参加しましたが、今年5月のクッキングハウス総会の日からこの日を楽しみに待っていました。北海道はコロナ感染が拡大して、夫を頼める ショートステイがなかなか見つかりません。ケアマネージャーさんが奮闘してくださいました。出発2日前にようやく決まり上京できたのも、友人や読者が「35年のお祝いの会に是非行っておいで」と背中を押してくれたからだと感謝しています。

11月17日、35周年を祝う会会場の調布市グリーンホールには500人以上の人たちが参加して、地域に根差した活動を祝いたいという思いが伝わってきました。テーマは「私のリカバリー　私達のリカバリー」です。

開演前までクッキングハウス関連の本の販売を担当しました。 あっという間に既刊本のほとんどが売れました。 メンバーさんたちが焼いたクッキーも完売。私も最後の1個を慌てて買いました。

「みんな出てらっしゃい」と声をかけた松浦さんの着物姿も素敵でした。舞台に並んだメンバー、スタッフ、ボランティアの数に圧倒されました。50人をはるかに超えていました。斉藤敏郎さんの司会もとても清々しかったです。

病気になったことの辛さや苦しかったことも全部受け入れて「私は私のままで明るくしっかり生きていくよ」と宣言した「花たちよ」で始まったコーラス。正直な言葉が心に響く詩と素晴らしい歌声に涙が止まらなくなりました。「あなたの声を聞かせて」は映画のタイトルみたい。つい先日観た

劇団文化座・佐々木愛さんから贈られたお祝いのお花の前で松浦幸子さんと

「あの日の声を探して」を思い出しました。
自分のリカバリーを語るメンバー6人がそれぞれに自分の辛かった時期と立ち直りを正直に語る姿に感動しました。 病気を公開する勇気と、自分らしさを取り戻す過程を語る姿が美しい。 新曲16曲は、5年前よりずっと パワーアップして心に深くしみました。新曲のどれにも私の思いが重なりました。 舞台と客席が一体になった演奏とコーラスでした。音楽の力をこれほど感じたことはありません。素晴らしいですね。オリジナルソングのすべてに関わった伴奏者でありディレクターである増田康記さんは舞台の端っこにいらしてお顔が見えなかったのが残念です。クッキングハウスの仲間たちから大きな励ましをもらいました。 いつか私のリカバリーも聞いてもらいたいです。
先日届いた会報「クッキングハウスからこんにちは」207号の松浦さんの文章の一部を引用します。「心の居場所は命に直結する場です。長いコロナ禍、ひとりで不安を抱えこんで孤立させてはいけないと、一日も休まず開き続け、安心を贈り続けてきました。こんな時こそ弱い力を寄せ合って一緒に生きていこうと、美味しいご飯をしっかり食べ、気持ちを語り合い、心豊かにするたくさんの学びをしてきました。対話を重ねながら16曲もの心にしみる優しい歌を作ったのです。苦しい時代だからこそ、心を寄せ合う歌が必要でした」
松浦幸子さんは長年の活動で12月5日に障害者福祉関係知事賞を受賞されました。私も喜びでいっぱいです。（樋口みな子）

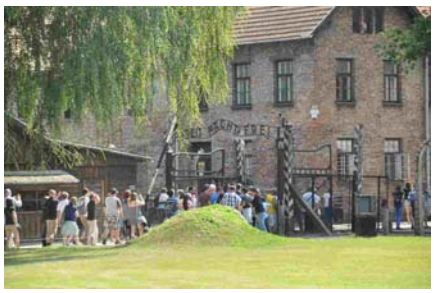
「憲法くん」江別に現る！

テレビに出ない松元ヒロさん ソロライブは満席に

写真・終演後松元ヒロさんと

「憲法くん」を25年間も語り続けている松元ヒロさんのソロライブを野幌公民館ホールで11月7日に聴いてきました。主催は江別憲法9条を語る集いです。
かつて社会風刺コント集団「ザ・ニュースペーパー」のメンバーとして人気を博した芸人・松元ヒロさん。1998年に独立。それ以来、時の政権に批判的なネタを舞台にかけ続け、全国を飛び回っています。作家井上ひさしさん、落語家立川談志さん、放送作家永六輔さんらがその才能に注目し、応援を続けてきました。「テレビで会えない芸人」は映画にもなりました。「観たいな」と思いながら見逃したので、江別のライブはありがたかったです。（2023年2月4日に「テレビで会えない芸人」上映会ご覧ください）
憲法前文をかみ砕いて笑いを誘いながら語りはじめました。「私のからだが、どういうふうにできているかを知っていますか。憲法の前文と百三の条文を、細胞にしてできているのが、わたし憲法くんです。日本国憲法は、この三つの考え方を理想としてかかげています。国民主権、基本的人権の尊重、平和主義です」。
ベトナム帰還兵ネルソンさんの物語にまつわる話が圧巻。街で偶然出会った女性はかつての同級生で、小学校の先生になったダイアンさんから「学校で戦争体験を語ってほしい」と頼まれます。語り終えてひとりの児童から質問されます。「ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか？」その問いがグサリと刺さります。逡巡した末に「イエス」と答えて、ネルソンさんは「戦争の残忍さ、過酷さを伝えていかなければならない」とアメリカだけでなく、さまざまな国で「戦争反対」と訴え続けるようになります。PTSDに長年苦しみながら「隣人を大切にすること」を学んだネルソンさんの姿をヒロさんは活写しました。涙が止まらなかったです。
憲法24条で「男女平等」を記したベアテ・シロタ・ゴードンさんのお話もありました。私は2000年12月に東京でインタビューした思い出があります。マルセ太郎さんにパントマイムを習ったお話もありました。私も銀河通信で紹介したことを思い出しました。思い切って楽屋を訪ね、記念写真を一緒に撮っていただきました。
自民・公明両党の「敵基地攻撃」合意に怒りがこみ上げました。「他に手段がない場合ミサイル基地を攻撃することは可能」とも発言。憲法9条の平和主義を守ってと声を大にして訴えたい。
（樋口みな子）

自然がなく命がない場所だった



撮影：黒尾和久さん。アウシュヴィッツ収容所の門「ARBEIT MACHT FREI」（労働は自由への道）とある

10月29日オンラインでアウシュヴィッツ生還者のヘディ・ボームさん（94歳）の貴重な証言を聞きました。主催はNPO法人ホロコースト教育資料センターです。
銀河通信184号（2014年8月15日）でアウシュヴィッツ博物館とビルケナウ（アウシュヴィッツ第二収容所）に行った体験を書きました。その時にガイドしてくださったのが日本人の中谷剛さんです。中谷さんから届いた講演は私も読者にお知らせしました。
ヘディさんはルーマニア出身のユダヤ人。1944年、ナチス・ドイツが侵攻し、ヘディさんは両親とともにゲットーに送られます。16歳の誕生日を迎えたばかりでアウシュヴィッツへ移送され、両親とも引き離されたのです。
ヘディさんのお話で一番印象に残ったのは「ベッドに8～10人いた。窓のあるバラックに自分の姿を見たが、自分だとは思えなかった。丸裸にされ、投げられた服をまとった自分は自分だとは思えなかった」「母は40代半ば。母に会うために健康でいようと努力した」「収容所はバラックで周りに緑はなかった。自然もなく命がない。茶色いきたない液体が食べ物だった」と語りました.。でも語れるようになったのは戦後50年を過ぎた頃からでした。
ナチスがした行為はとても人間とは思えません。

カナダで新しい家庭を築き、少しずつ体験を若い世代に語りはじめたと言います。そして2015年、「アウシュヴィッツの簿記係」と呼ばれた元ナチ親衛隊員のオスカー・グレーニングの裁判で証言をしました。「最初は行きたくなかった。でも失われた人の声を伝えなければならないと思った」「証言する機会ができてやっと両親に会えた気がした」に心が震えました。弁護士のコメリス・リスターさんは「ドイツの司法制度では生き残った人々に対しても殺人未遂被疑者として裁判が成り立つ」と話されたことにも勇気づけられました。ドイツが犯した戦争犯罪に向き合う姿はメルケル前首相の発言からも伝わってきます。

日本は戦争加害にまったく向き合っていません。二度と戦争はしないと誓い、新しい憲法が制定されたことをもう一度思い出してほしいです。（樋口みな子）

朝鮮学校で学ぶ子ども達に「平和友好米」を贈る運動にご参加を

福原正和

お米のお礼に代表の山本玉樹さんが花束を受けとりました。（撮影・樋口みな子）

皆様のご協力で10月27日第47回「平和友好米」500キロと玉葱5箱・長葱3袋(藪田生産)と図書券（5万円分）を、北海道朝鮮初中高級学校（札幌市清田区）に無事にお届けする事が出来ました。この事業に参加頂いた28名と当日参加の14名の皆様に、心より感謝申し上げます。

第1回目から中心として頑張ってこられた山本玉樹先生は今年満93歳、最近路上で転倒し救急車で運ばれる事故？（救急処置のみで帰宅）があり、ご家族もご心配され、当初当日の参加が危ぶまれておりました。ただ最近の体調から来年の参加はかなり難しく、今年が最後の機会になる可能性が高く、万難を排して山本先生を自宅までお迎えし、転倒などに注意し自宅までお世話をするという条件で、山本先生に参加頂く事が可能になりました。

山本先生が朝鮮学校に着くと、1976年松浦一北海道平和委員会会長と山本先生が初めて朝鮮学校にお米を届けた時の朴校長と山本先生がよくお話しをされる北海道から初めて東京の朝鮮中高級学校・朝鮮大学校に進学された金和秀氏が玄関でお迎えし、そのお二人（共に80代）と学校先生方の支えで山本先生はゆっくりと体育館に入ってこられました。その後すぐ長沼藪田さんが運転するトラックが到着。生徒さん総出でお米を舞台まで運び、机の上に高く積まれました。

生徒全員の歓迎の合唱のあと、舞台前方に積まれた「平和友好米」の前、上記お二人に両脇を支えられ、小さな生徒さんが作った「日朝友好」の工作メダルを首に掛けてもらい、女子生徒から花束を贈られる山本生の姿は印象的で、私は胸がいっぱいになりました。

山本先生はマイクを持ち、「この学校が作られる時、生徒さんの親御さん達がどんなに苦労されたか、私は少し知っています」「この学校を作った皆さんのハルモニ・ハルボジが皆さんの今日の姿を見たら、どんなにか喜んでいられると思います」と強くしっかりとした言葉で、感動的な挨拶をされ、そこに参加した皆が「胸がいっぱいになり涙が出そうだった」と話していました。

山本先生は体調を考え短時間の予定でしたが、顔色も良さそうでしたので、食堂で生徒さん達と一緒に給食を頂く事になりました。途中階段がありましたが、「年寄り扱いするな」と怒る山本先生に「先生は充分年寄りです」となだめ車いすに乗ってもらい体格の良い高校生や若い教員6～7人に支えられ階段を降り食堂に向かいました。食堂では豚肉とキムチ味の丼（カルビクッパ：忘れられない程美味でした）が提供され、山本先生の前に上記のお二人が座り、両隣に藪田さんと私が座り、歓談しながら食事をしました。あっという間の時間でしたが名残惜しそうな山本先生をまた車いすで玄関まで送り靴を履くのも皆でお世話し、多くの職員や生徒さんが手を振って見送り、山本先生はサポートする女性二人と共に学校をあとにしました。「今日は良かった、嬉しかった」と上機嫌で帰宅されたとの事です。

（北海道在日朝鮮人の人権を守る会　事務局）

ポーランドとアイヌ女性の国際アートに関わった一人として

藤野知明

11月２３日『女は語るMowi ONNA』撮影・樋口みな子）

（11月23日と28日、札幌文化芸術劇場 hitaruなどで北海道ポーランド文化協会などが開催した国際アートについて藤野知明さん（『八十五年ぶりの帰還　アイヌ遺骨　杵臼コタンへ』監督とリュミエール池さんに書いていただきました）

ポーランドの映画祭に『八十五年ぶりの帰還　アイヌ遺骨　杵臼コタンへ」を上演し入選しました。

ポーランド行きのもう一つの理由は、11月に上演される催しに記録として関わるのですが、その関係者が皆、映画祭の近郊にいたので、話を少しでも聞きたかったからです。女性3名で活動するアマレヤシアター＆ゲストという舞踏のグループとヤドヴィガさんです。

アマレヤの代表のカシアさんは土方巽についての博士論文を書いた人です。アマレヤは2018年頃からアイヌ女性会議メノコモシモシとパフォーマンスを共同制作しています。

2019年にはエンチウ（樺太アイヌ）の女性に焦点を当てた「AMAREYA+AINU WOMAN」を上演しています。（略）2021年はアマレヤとメノコモシモシがそれぞれ『アイヌとカムイのためのレクイエム』という映像を作るという方法をとりました。私はメノコ側の制作で撮影と編集として初めて参加しました。

その過程でアマレヤの「her story（女性の物語）」という考え方に興味を持ちました。自分なりの解釈では、これまで歴史は男性が作り上げてきた。歴史とは大きなストーリーだ。そこに女性はほとんど関わることが許されなかった。「her story」は女性が自分の物語を語る試みであり、男性が作り上げた政治・経済・戦争といった大きなストーリーではなく、個人の小さなストーリーに光を当てる。

アマレヤの舞台の作り方も独特です。先に台本があり演出家が指示するという方法はとりません。今回は『女は語る"Mowi ONNA"』と題し、暗黙知の伝道者としての『手』に焦点を当てています。

稽古ではアイヌ女性たちがしまってきた記憶を呼び起こすため、まず手のひらに大事な人の名を書いてもらい、次に各自の手のひらの輪郭を布に刺繍し、そこに自分の過去や未来を描く作業をしました。23日の本番では皆台本無しに自分の物語を語りました。

ヤドヴィガさんは元駐日ポーランド大使で、現ユゼフ・ピウスツキ博物館の副館長です。チェホフスキさんのつれあいでもあり、今回のポーランド滞在中、通訳をしてもらいました。ヤドヴィガさんは11月28日にシアターZOOで「祖霊祭 夜明け前/シンヌラッパ・ケンネニサッ」の演出。出演者はメノコモシモシとアマレヤです。ポーランドの国民的作家アダム・ミツキェヴィチの詩をアイヌの歴史と重ね合わせて表現しようとしています。

「『祖霊祭』　夜明け前」を観て

リュミエール池

11月23・28日にポーランドの詩人ミツキェヴィチ作『祖霊祭』に関係する映画、講演、朗読等を鑑賞することができた。この中で最も心に残ったのは、メノコモシモシ（(アイヌ女性会議)とポーランドのアマレヤ劇団による祖霊祭夜明け前の上演であった。ポーランドやアイヌの人々のことに詳しいとは言い難い筆者が聞きかじりのことを述べるのは僭越なので、パフォーマンスを見て浮かんできた二つの感情について述べるに止めたい。

一つは各演技者が自分の言葉で右と左の手に語り掛けるシーンが、ゴーギャンの大作『我々はどこから来たのか、我々は何者か、我々はどこに行くのか』が問いかける人間の本質を思い出させ、先祖を敬う強い思いを感じた。もう一つは、演技が呼び起こす胸に沁みる思いである。これは古語の「かなし」にも通じる感覚であった。「かなし」というと現代では悲嘆の「悲しい」か、哀切を伴う「哀しい」を意味するが、古代では「愛し」とも綴り、「愛しい」「可愛い」「素晴しい」の感慨をも表わした、語源的には「かぬ」に繋がる語であった。「耐えかぬ＝我慢できない」と考えると、耐え難いほどの「悲しさ」にも、堪らぬほどの「愛しさ」にもしみじみとした「趣の深さ」にも通じるのだ。こうした思いを呼び覚ませてくれた各演技者とチェホフスカ芸術監督ら関係者に心から拍手を送りたい。

購読料と寄付をありがとうございます（敬称略）
10.12～12.12

市川利美　阿部一子　長谷川貴子　石井美雪　安田成男　　柴崎徹
吉田雅子　岡村雄二　高橋儁　山本伸夫　匿名　　岩井善昭
梅沢俊　津田孝　文聖姫カンパも含めて46,000円は印刷と送料に使わせていただきます。郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 年間2.000円です。web読者のカンパも歓迎します。各地の話題など読者のみなさまの投稿や写真をお待ちしています。1500字以内で

今でも思い出すあの頃のこと

『大雪とと石狩の自然を守る会』５０周年に寄せて

美瑛富士現地研修会で若き日の私
（撮影・寺島一男さん）

私が「大雪と石狩の自然を守る会」に出会ったのは、はるか昔1974年頃です。

本州から北海道へUターンしましたが、旭川は初めての地でした。そんなある日、「大雪と石狩の自然を守る会」主催のドキュメンタリー映画「イタイイタイ病」の上映会のポスターを街で目にして会場で出会ったのが、当時事務局長寺島一男さんと事務局メンバーでした。すぐに溶け込み、いつの間にか機関紙「ヌタプカムシペ」の編集担当になっていました。

意外と思われるかもしれませんが、私は人見知りで会ったことのない方に電話するのがとても不得手でした。電話の前で何度立ち尽くしたことか。でも個人で「銀河通信」を隔月で発行するきっかけになり、先日231号を発行し（1988年7月創刊）今なお続けている原動力になっています。来年7月で発刊35周年になります。時々送られてくる「ヌタプカムシペ」は173号。活動が写真と文章で綴られ幅広い活動にすごい！と感嘆しています。揺らぐことなく自然を守り、自然に親しむ活動を続けてきた「大雪と石狩の自然を守る会」50周年おめでとうございます。

私は登山は高校時代に1度だけ、夕張岳に登った経験があるぐらいでした。それは自宅から学校まで1時間歩くトレーニングを1週間続けて頂上に立ったのです。

事務局メンバーは体力抜群のつわものばかり。まったく体力のない私が大規模林道問題に取り組むことになろうとは思ってもみませんでした。ある時、環境調査をすることになり、私も初めてのテント泊を体験しました。なんと夜からは雨になりテントの中にまで水が入り、夜じゅうの豪雨の音が怖くて眠れなかったです。当時まだ元気だった江別の両親を思い出し「遭難したら悲しむだろうなぁ」と。でも私以外のメンバーはなんでもないかのように静かに眠っていたのです。山男とはこういう人たちか！と心底冷静さと逞しさに感じ入りました。

1975年、国策パルプ工場から石狩川に水銀が流されているという衝撃的な事件が起きました。早速「石狩川水銀なくす市民の会」が設立されました。稲田孝治さんや、当時理科教師であった三浦國彦さんらが中心になって、パルプ工場近くの川から汚泥やウグイなどを採取して旭川医大の公衆衛生学講座の土井陸男さんのところに持って行き、水銀を測定しました。その当時、私も公衆衛生部で土井先生の助手（パート）をしていたのです。（その後旭川医大病院検査部に入職）

NHKアナウンサーの檀上滋さんがスクープとして報道したことが忘れられません。新潟大学の鈴木哲さん（当時は助手）が石狩川の水銀汚染調査に入りました。

なぜ、私が公衆衛生部なの？と皆さんは意外に思うかもしれません。職業は臨床検査技師ですが、最初に入職したのは大阪のM電気健康管理センターの産業衛生部でした。テレビや冷蔵庫など電気製品工場で排出される有害物質（当時は公害といいましたね）の測定を行っていました。当時、チッソ工場の有機水銀が海に垂れ流され魚を汚染し人の体に入り込み、たくさんの人が水俣病になり、今も苦しんでいます。若い私は、汚染物質の測定結果と共に「従業員の健康被害が深刻になる前に工場現場の改善を」と訴えるコメントを書きました。当時40代の部長（医師）は「異常値だとわかるような表現はしてはならない。書き直し！」と命じました。書き直しようがありません。何度か上司からの苦言に耐えきれなくなりました。退職して紆余曲折の末に旭川にたどり着きました。

その頃の知識が、旭川の水銀汚染問題で役立ちました。学生時代にたった1回ですが、宇井純さんの東大自主講座「公害原論」を市民の一人として講堂の一番後ろで聴いたことがあります。水俣病患者支援を積極的にされていて、私も「東京・水俣病を告発する会」に入会しました。旭川でユージンスミスの「水俣展」を開催できたのも嬉しかったです。水俣病は今も終わってはいません。実行委員長を担当し多くの人に水俣病の怖さを知ってもらうことができたことも懐かしいです。今も熊本にある相思社や、水俣フォーラムの会員としてささやかな支援をしています。

自然児学校（自然学園「グリーンフォーラム旭川」）の開校が1975年とありました。子どもたちが、自然の中でさまざまな体験をする楽しさを今も思い出します。「ひぐま大学」が今も続いているのも素晴らしいです。いつか時間がとれたら「ひぐま大学」に参加したいが夢です。

（樋口みな子）

本 BooKs

健全な職場環境をつくるために

小さな労働組合 勝つためのコツ

鈴木一著　寿郎社　1,980円

古い知り合いである鈴木一（はじめ）さんが、その地域労組専従オルガナイザーとしての体験をもとに本に書いたと聞きさっそく購入した。いやー、おもしろい。

タイトルに「勝つためのコツ」とあるがいわゆるハウ・ツー本でもないしお堅い組合理論本でもない。ろくに勉強していない会社側弁護士を労働法という刃でバッサリ切り捨てるところは、高倉健さんの任侠映画のように痛快だし、ギリギリの瀬戸際で権利を回復した労働者たちの実例は、名人の人情噺のように心にしみる。それでいて一冊読み終わると雇われる側の権利と組合活動の基本が自然と自分の頭に入っている。

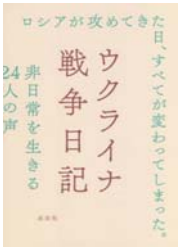
本の中には、「闘わずして勝つ」「敵の中に味方をつくる」などいくつかのキーワードが出てくる。その中で一番共感したのは「腹をくくる」。「（それができないなら）悪いことはいいません、組合なんておそろしいものに関わるのはやめ、一生使用者に媚びへつらって生きることです」には思わず拍手。

この本は雇われる人だけでなく、雇う側の人たちにもぜひ読んでもらいたい。鈴木さんの目標は、「組合側の一方的勝利」ではなく「健全な職場環境をつくる」ことにあるから。

鈴木さんは「法学部どころか、大学も出ていない私」と控えめだが、その彼がやむにやまれず身に付けた知識と能力ほど役に立つものはない。「やむにやまれず」とは、たぶん鈴木さんのなかで湧き上がる「同じ人間がこんな目にあうのは許せない！」という熱い人権意識ではないだろうか。ベトナム人技能実習生のケースでは「正月休みだからもう少し寝かせてよ」と本音をもらしながら「50年前の飯場」同然の宿舎を見てエンジン全開となるし、自ら「辞めます」といわされ、あちこちの相談先で「もうどうしようもありません」といわれたケースでは逆転勝利を導く。熱い人権意識は労組専従オルガナイザーと組合にとって一番大事なものだが、日本の現状はキビシイ。この本はそんな現実を変える希望の種だ。

そろそろお正月なので初夢を二つ。一つ目はこの本が中学校社会科の教科書になりますように。世に出て働く若者たちに現実の厳しさとそれに立ち向かう方法を教える絶好の教材だ。二つ目は、この本を原作にした連続テレビドラマを観たい。韓国の「ウ・ヨンウ弁護士は天才肌」の向こうを張った社会派ドラマとして。主演・高倉健さんでといいたいがもう叶わないので、大地康雄さんで。

今もあちこち飛び回って忙しい鈴木さんがよく本を書けたなーと感心していたら、あとがきに「身近な若者二人に背中を押され」とあった。そのお二人に感謝したい。（油谷良清）



戦争という恐怖と絶望を助け合う人々の声

ウクライナ戦争日記

Stand With Ukraine Japan著
左右社編集部編　左右社
1,980 円

2月24日、突然ロシアがウクライナに侵攻開始した時に、現地や日本にいたウクライナ人ら24人が綴った日記。

戦争という恐怖と絶望の中、助け合い懸命に生きる姿がひしひしと伝わってきます。

最初に登場するのはハルキウで美容室を経営しながら、ボランティアとして特別な支援を必要とする孤児院に通っていた41歳の女性です。車の運転が得意だった彼女は、友人から4人乗りの車を借り、救助を求める人々を乗せて、車が没収されそうな検問所を避けながら激戦地マリウポリを脱出

します。しかし、巨大な軍事拠点では、マシンガンを持った男が「車を置いていくなら見逃す」と言い放ちます。私もその現場にいたら「助けて！」と叫んでしまいそうでした。彼女は冷静。「別の上司を呼んでほしい」と頼み、助けられます。日頃のボランティア活動が彼女を救ったのかもしれません。

ある女性はこう書きます。「『なんでパパは軍に入ることを選んだの？なんでただのひとであることを選ばなかったの？』と聞いてくる。私は彼女とは一緒に泣かない。耐えて、シャワーの中で水が顔に注がれるときにだけ、思いっきり泣くのだ」。

戦争は一夜にして、普通の日常が壊れてしまうのだと胸に突き刺さり、何度も本を閉じました。

それでも書いた人たちの勇気を無にしてはならないと思います。

日本では「敵基地攻撃」が国民の意見も聞かずに決まりました。自衛のためなら攻撃が許されるようになったら、戦争になるのではと怖いです。一読をお勧めします。（樋口みな子）

グリーンランド漂泊の旅

狩りと漂泊
裸の大地第一部

角幡唯介著　集英社　1,980円

今回の著書は「極夜行」から白夜のグリーンランドへ。角幡さんの旅は明るくてこちらも救われます。

角幡さんは食料を狩猟により自給することで、時間的な制約を打破できるのではないかと考えます。一緒に行動するのは「極夜行」にも同行した犬のウヤミリックだけです。必要最低限の食糧は用意しますが、狩りを主体とする漂泊行です。辛い体験も、ユーモアをこめるためか、楽しい気持ちになります。

現代の探検は、GPSを使う人が圧倒的に多いですが、角幡さんは方位を知るコンパスしか用いません。「人は存在のなかで生きているのではなく、存在の現象のなかで生きている」は名言です。私にはそんな体験はありません。

「極夜行」も読みました。なじみの土地となじみの犬が出てくる新しい旅のあり方を模索し、極地でそれを見出した角幡さんの挑戦はまだまだ続きます。

上手く獲物にありつければいいけれど、餓死もありえる探検に、ハラハラドキドキします。獲物がいる場所を予測したり、出会っても逃げられたりと、時には10キロも体重を落として命の危険と背中合わせです。無事に帰って来られるのは、自然を読む力のように思いました。事前に大雑把な地図が頭に入っていること。先住民たちの暮らしの足跡を知っているのは、地理学者であると思いました。著書には地図が収められています。こちらも足跡が分かり嬉しいプレゼントです。

私は北海道中央分水嶺踏査を、某山岳会で登山道のない道を登り、探検のような登山を経験しました。でも死ぬのも怪我も怖いので冬山は卒業しました。角幡さんの冒険で疑似体験させてもらっています。

（樋口みな子）

シネマグラフィティ（私の映画評）

死をみつめること、
それは生を見出すこと
『愛する人に伝える言葉』
樋口　みな子

札幌映画サークル会報シネアスト2022年12月号掲載

余命1年以内と宣告された患者が、大切な人とどう向き合うかをテーマに、エマニュエル・ベルコ監督が人間賛歌をうたいあげました。

母クリスタル（カトリーヌ・ドヌーブ）と息子バンジャマン（ブノワ・マジメル）は名医として知られるドクター・エデ（ガブリエル・サラ）を訪れる。彼に一縷の希望を託す母子ですが、エデは「ステージ4の膵臓がんは治せない」と率直に告げます。もうこの場面から釘付けになりました。私の夫はがんではないけれど、大きな病気を抱えて生きています。

ベルコ監督はがん専門医として有名なサラ博士に出会い、その医療の取り組み方を見学して、映画の方向性が決まったそうです。サラ医師の人物像をそのままエデ医師として物語に入れ込み、実際本人が演じています。そのため作品への説得力は圧巻！

限られた時間のなかで人生を見つめ直し、穏やかに死と対峙できるようになる過程を描出します。ショックのあまり自暴自棄になるバンジャマンにエデは、「命が絶える時が道の終わりですが、それまでの道のりが大事です」と語り、病状の緩和による生活の質を維持するために化学療法を提案。「一緒に進みましょう」と励まします。エデは患者に真実を伝えることをモットーにし、「人生のデスクを片付ける」必要性を説くのです。全部、自分の言葉であり、治療に音楽を採り入れ、病院の患者の真ん中でタンゴダンサーが踊る場面まで再現しています。スタッフ間のカンファレンスも含めて、患者にとっては不安や恐怖を解きほぐす大切な時間になっています。

がんと向き合うバンジャマンの揺れ動く気持ちが丁寧に描かれ、その先に出会うものがあることを知るのです。

演じたサラはインタビューに、「深刻な病に陥った患者は、宣告を受けて身の破滅を感じます。ですから、自分は一個の人間であり、尊厳を実感し、人生で何かを成し遂げることができると感じられるようにサポートすれば患者は変わります」と語っています。患者の尊厳を守り、患者の気持ちを大事にする姿勢に感銘を受けました。こんな医師や、医療スタッフに出会えたらどんなに幸せだろうと思いました。

私もかつては医療現場で働いていました。リハビリを必要とする病院でしたが運動会やお祭りなど、さまざまな行事を取り入れてリハビリ効果もありました。ずいぶん昔のことですが、あの頃の医療にはやさしさや温かさがあったと感じます。今はコロナ禍で医療がひっ迫しているだけでなく、スタッフも

余裕がなく笑顔が少なくなっているように思います。
演劇教師のバンジャマンは命を振り絞って生徒たちを指導。母のクリスタルは、バンジャマンのかつての恋人に連絡します。2人の間にできた息子がいましたが、クリスタルによって生まれる前に別れさせられています。遠くから会いに来る息子。でもまだ見ぬ父に会う決心がつかないのです。その複雑な心境が手に取るように伝わってきました。
エデは愛する人に伝えてほしいと5つの言葉を教えます。
死を見つめることは、今の生を見出すこと。バンジャマンが死を受け入れ、全うするまでの過程、そこまでの道標を照らすエデ、家族への寄り添いが心強い。生を全うすることの尊さが貫かれていて、決して暗くはありません。たくさんの学びがありました。爽やかな涙を流して、私も前を向きました。
「赦す　赦して　ありがとう　さよなら　愛してる」。愛する人の最期に、この言葉を伝えたい。

カイアは湿原で生き抜いた

ザリガニの鳴くところ

ディーリア・オーエンズ原作、オリヴィア・ニューマン監督

累計1500万部を超える大ヒットを記録した動物学者ディーリア・オーエンズによる小説を映画化した『ザリガニの鳴くところ』。私も原作に感動した一人です。（銀河225号で紹介）
ノースカロライナ州の湿地帯で発見された、街の有力者の息子の変死体。その犯人と疑われた、湿地で孤独に生き続けてきた少女の半生と、彼女をめぐる裁判の行方を描いたサスペンス・ミステリーです。
一番年の近い兄ジョディが暴力を振るう父の元を去るととカイヤ（デイジー・エドガー＝ジョーンズ）は父と二人暮らしになってしまいます。。妹カイアへ残した助言「父に暴力を振るわれそうになったら、“ザリガニの鳴くところ”へ逃げろ」という形で登場します。
食べ物やろうそく・マッチなどの生活必需品も底をつく中、カイアは朝方、湿地帯のムール貝を収穫し、黒人のジャンピンとメイベル夫妻が営む雑貨店に持っていき「買って」と交渉します。ジャンピンは「カイアはとうとう父親にも捨てられたのだ」と察しますが、何も言わずカイアにガソリンと食糧を渡します。それ以来、何かと気にかけて面倒を見てくれるのです。
成長したカイヤはある日、湿地帯の森の木陰で人の姿を見つけ、慌てて隠れます。向こうもカイアに気付いたようです。その人物は、同じく成長したテイト（テイラー・ジョン・スミス）その人でした。カイアが鳥の羽を好きなことに気付いたテイトは、切り株に鳥の羽を置くようになります。カイアはその鳥の羽に気付き、毎日おかれる鳥の羽を楽しみにするようになります。ある日、鳥の羽とともにメッセージが添えられていましたが、学校に通っていないカイアはそのメッセージを読むことができません。テイトは読み書きを教えると提案します。聡明なカイアはテイトによって世界が広がっていきます。次第にカイアは湿地の生態系に興味を持ち始め、図書館の本を読み進め生物学を学ぶようになりました。湿地で生きる術も身につけます。二人は恋仲になりますが、テイトは街を出て都心の大学で学び、疎遠になってしまいます。
帰って来ないテイト。「湿地の少女」に興味を持ったチェイスに誘惑されて付き合うようになりますが、街に出て婚約者がいることを知ります。
裁判で「湿地の少女」と蔑視されてきたことをカイアは知ります。人権弁護士トム・ミルトン（デヴィッド・ストラザーン）の弁論を息を飲んで見つめました。「過酷な自然」を生き抜いたカイアに幸せあれ！原作に感動してテイラー・スウィフトがオリジナル・ソングを作曲。初恋の人テイトと生涯を共に出来たのも良かった。（樋口みな子）

新しい人生へと歩き出すふたりの女性

モロッコ、彼女たちの朝

マリヤム・トゥザニ監督

札幌では2021年に公開されて、日本で初めて公開されたモロッコ映画です。短い上映だったのか見逃しました。
札幌映画サークルで、12月10日に上映会があり、テーマといい映像の美しさといい、出色の映画でした。トゥザニ監督の演出も素晴らしい長編デビュー作です。
女性2人の友情を通じ、女性に対する見えない不条理を明らかにするテーマを打ち出しながら、フェルメールやカラヴァッジョに影響を受けた陰影が効いた端正な映像美を創り出しています。
夫を亡くし、娘を育てながら小さなパン屋を営むアブラは、戸を叩く音を不思議に思う。訪問者はいないはずなのに物売りだろうか。応じてみると、玄関先にはお腹の大きい妊婦が立っていました。彼女はサミアと名乗り、臨月にも関わらず仕事も住居も追われ、あてもなくカサブランカの旧市街を彷徨い歩いていたという。人目につくとアブラ自身も周りから非難されるかもしれません。「帰って」と言ったものの、放っておけないと自宅に連れ帰るのです。
サミアはパン屋を手伝うようになり、アブラとうちとけて行きます。でもモロッコでは婚外交渉と中絶が違法なのです。未婚の妊婦は病院で出産しようものなら警察が飛んできて逮捕されるそうです。
日本人には馴染みの薄い食べ物の数々が美味しそうで、食事前だったのでおなかが鳴りました。また街中には公共の窯があり、人々が自宅でこねてきたパン生地などを持ち寄りおじさんに焼いてもらったりしていて、モロッコの食文化を知ることができました。
トゥザニ監督が大学卒業後に家族で世話をした、未婚の妊婦との思い出を元に、イスラムの家父長制度で女性たちが直面する困難と連帯を浮かび上がらせています。理性と母性の狭間で苦しみ葛藤するサミアと、何とか生んで育ててほしいと願うアブ

ラの表情や仕草に物語が込められていました。
さまざまな映画祭に正式出品され、アカデミー賞国際長編映画賞出品作で女性監督初のモロッコ代表です。余韻の残る素晴らしい作品でした。（樋口みな子）

四季の野菜が紡ぐ物語

土を喰らう十二カ月

水上勉原作・中江裕司監督

少年時代に京都の禅寺で精進料理を学んだ、水上勉のエッセイが元になった作品です。
小説家のツトム（沢田研二）は信州の山奥の古い民家で愛犬と暮らしています。春夏秋冬の景色が美しい。冬は雪を堀り、土の中から新鮮な野菜が堀りだされます。かまどのある台所が懐かしい。ツトムの担当編集者で25歳下の恋人・真知子（松たか子）が時々訪ねてきます。
畑で育てた野菜や山で収穫した山菜などを使って作る料理が実に美味しそう。真知子が、満面の笑みで食する姿がチャーミングで、私のおなかも食欲をそそられて「グー」と鳴りました。
この作品が出来るまでに1年半かかったそうです。料理研究家の土井善晴さんが監修したツトムの料理は大地の力強さを感じるものばかりでした。沢田研二がすべて料理したというからすごい！
甘いマスクと歌で一世を風靡したジュリーですが、老いをさらしたジュリーも味があっていいなと思いました。この作品は代表作になると思いました。
北海道の四季も美しいですが、変化に富んだ四季がこんなにも豊かな実りを生むことにあらためて感動しました。丁寧な撮影が秀逸。（樋口みな子）

11月のキリバリから　**トマホーク購入という狂気**
青木理(ジャーナリスト)　抵抗の拠点から第397回　サンデー毎日2022.11.20-27

防衛費を一挙に倍増せよと勇ましく吠えていたと思ったら、今度はトマホークの導入まで進めるのだそうである。ここにきて各メディアも報じはじめたように、遠隔地を直接攻撃する米国製の長距離巡航ミサイル=トマホークの射程は2500キロに達するとされ、実際に配備されれば朝鮮半島の全域はおろか、中国の主要都市までを射程に収める。政権と与党は現在、防衛計画の大綱をはじめとする防衛政策3文書の取りまとめ作業を進めていて、いわゆる「敵基地攻撃能力」の保有を明記する構えだが、それさえも先取りする形ですでにトマホーク購入を米政府に打診したとも伝えられている／あらためて記すまでもなく、専守防衛を一応の国是としてきた戦後この国の矜持は、すでに末期の叫びを上げている。しかも明らかに他国への直接攻撃を可能とする長距離巡航ミサイルの保有、配備は、現実化すれば戦後の矜持を根底から覆す一大転換。果たしてそれでいいのか―などと記しても、戦後の矜持自体に憎悪の眼を向け、防衛政策の転換そのものを目論む政権や与党の面々には蛙の面に小便だろう。ただ、この国の現状を冷静に俯瞰したとき、私たちはそんなことに狂奔している場合か、もっと虚心に自らの足元を見つめ直した方がいい。／賃金は増えないのに物価は上昇し、その主因にもなっている急速な円安は止まる気配がない。インフレが深刻化する米国が利上げによって金融引き締めに乗り出し、日本が相変わらずジャブジャブの金融緩和路線を続ければ、利回りのいいドルが買われて円が売られるのは理の当然。なのに日本が金融緩和路線を修正しないのは、利上げすれば日銀が大量保有する国債の利回りも上昇してしまうから、踏み切りたくても踏み切れない自縄自縛なのが実態に近い。（まとめ・M・M）

日光連山の南端から

当地、いつのまにか森の日々にコガラとエナガの混成隊が加わり、短時間ですがお昼前後には、賑やかにこの辺りを旋回し始めていました。私はこれをモーニングフライトと呼んでいます。色鮮やかな紅葉もお終い。クヌギやコナラ、クリなどは渋いアッシュブラウンに。冬はすぐそこまできています。チャボの卵番号②から育ったニコが初めて卵を産みました。数日前からこれまで聞いたことのない鳴き方をしているので、おかしいなと思っていたのです。今日、タロベーが見つけました。2台のエアコン室外機のわずかなスペースに3ケ、鶏小屋の寝床に1ケ。小さな小さな卵、感動のあまり涙が出ました。（文・写真とも貞兼綾子さん）

みなさまの投稿をお待ちしています。1000字から1500字以内で写真もお願いします。

夫の介護があり紙面の縮小も考えています。取材する時間も余裕もありません。

11月19日水越武さんの写真集「アイヌモシリ　オオカミが見た北海道」の刊行記念スペシャルトークで滅多に会えないゲストと。左端及川文さん、一人置いて水越武さん、小野有五さん、梅沢俊さん（撮影・仮谷志郎さん）

2023年が平和な年でありますように

11.18 羽田上空からの富士山と12.3 野幌の朝焼け）撮影・樋口みな子